

歌唱指導における訳詞歌曲の活用

田代 和久

要旨：声楽学習では一般的にイタリア語などの外国語歌曲を教材として、声楽演奏技術の向上を図るが、学習していない言語による歌曲の場合、歌うことができるまでにやや高いハードルがある。また教育現場での声楽の活用を考えたとき、早い段階で日本歌曲の演奏法についても学習しておく必要がある。そこで外国語歌曲に日本語をつけた訳詞歌曲を教材として活用すると、演奏技術と日本語特有の歌唱法の両方を習得できるのではないかと考えた。歌曲における訳詞は明治時代より始まり、現在も高等学校教科書に訳詞歌曲が多く掲載されている。その中でも教科書会社3社に掲載されている《野ばら》を合唱の授業で扱い、それに関する学生アンケートをもとに教材としての可能性を検討し、音楽専攻科目、初等教育課程科目それぞれについて具体的な活用法を示した。

キーワード：訳詞歌曲、声楽、歌唱教材、合唱、ヴェルナー《野ばら》

1. はじめに

声楽学習の初期において、発声や表現技術の基礎を形づくるという目的で、イタリア語による歌曲を教材とすることが一般的である。イタリア歌曲を主としながら、ドイツ歌曲、フランス歌曲などの歌曲、オペラアリア等外国語の楽曲を教材の中心として学習が進められる。歌曲は原語で演奏することが基準となっているが、それが未習の原語である場合、まず発音を学習して歌詞を読めるようにした後、対訳を見るなどして歌詞の内容を理解する必要がある。このように外国語の歌曲は歌唱技術習得のために必須ではあるが、初学者にとって歌うことができるまでにいくつかのハードルが存在する。

声楽について学んだことを生かすことのできる最初の機会は、コンサートなどの演奏活動よりも教育実習での音楽の授業、合唱などの教育活動であることが多い。そこで扱われる教材は独唱曲にしても合唱曲にしても、日本語歌詞の楽曲がほとんどである。それらを指導する前提として、日本語による歌唱法を身につけておく必要があり、そのために授業でも日本歌曲を取り上げて演奏経験を積んでいくのだが、日本歌曲を教材として扱った場合、しばしば演奏の困難さという問題に直面する。中学校の共通教材に採られている《夏の思い出》《花》など体感的に歌いやすい曲もあるが、音の高低差の大きさ、とくに原調では音が高すぎる曲が多いこと、日本語ではあるが意味を把握しづらい歌詞、覚えにくい旋律や歌と異なる動きをするピアノ伴奏から生じる音取りの難しさ、大きな声で歌っても成立しない繊細な曲想など、心地よく歌う妨げとなる様々な要因が重なり、声楽技術そのものの獲得目的とはしづらいという側面がある。

そこで、外国語歌曲を日本語訳詞で演奏すると、言語による制約がなくなり、声楽技術の向上を図りつつ、日本語特有の歌唱法についても習得を図れるのではないかと考えた。外国語による声楽曲について日本語訳詞をはめた作品を、以降ジャンルに関わらず「訳詞歌曲」と記したい。訳詞歌曲には原詩の意味とは異なる歌詞をつけた作品は含まないもの

とする。訳詞歌曲そのものについての価値や歌唱指導への活用法について考察を加え、授業における具体的な実践の準備としたい。

2. 高等学校教科書に見られる訳詞歌曲の現状

西洋の音楽に日本語の歌詞をつける作業は、明治時代より行われてきた。伊沢修二による日本最初の音楽教科書『小学唱歌集』（明治14年～明治17年）に掲載されている外国曲は、メロディに原詩とは関係のない歌詞もあてられていた。明治32年『高等女学校令』により高等女学校が増加し「女学校の増加は優美な歌曲の需要を招来し、中略、優れた訳詞による外国の名曲も広く出回ることとなった」¹とあるように、原詩の内容に即した訳詞歌曲が作られるようになった。特に近藤朔風は明治42年に《ローレライ》《野なかの薔薇》（野ばら）《菩提樹》などを含む『女声唱歌』を発表するなど重要な存在であった。大正時代に移り、堀内敬三は「原歌詞の意味内容を正確に伝え、詩的情趣を生かし、日本語の詩としても鑑賞に耐えるものとしなければならない」²と述べており、《君よ知るや南の国》《ブラームスの子守歌》など定番とも言うべき多くの作品を残した。

近藤朔風と堀内敬三による訳詞歌曲は現行の高等学校音楽教科書にも見ることができ、特に近藤朔風訳詞によるヴェルナー作曲《野ばら》は教科書3社に掲載されている。高等学校教科書では外国語歌曲が多数扱われており、訳詞歌曲が歌われる主な機会の一つであると思われるが、高等学校での教科書の教材使用率が高くない実情を考えると、今後歌われなくなる可能性も十分あり得る。文部科学省は小学校共通教材について「我が国で長く歌われ親しまれてきたうたを取り扱うことは、我が国のよき音楽文化を受け継いでいく意味からも大切」³と位置づけている。近藤朔風、堀内敬三などの訳詞歌曲も長年歌われてきており、受け継いでいくべき価値のあるものとして位置づけるべきではないか。

訳詞歌曲が多数掲載されている現行の高等学校の教科書では、外国曲の日本語訳詞についての扱いを2通りに分けることができる。楽譜上に原詩と訳詞が併記されているもの、原詩は省かれ訳詞のみ記載されているものの2通りである。訳詞のみ記載の場合、その教科書では原詩で歌われることは想定されていないと考えられる。3社の教科書で訳詞のみ記載されている楽曲は以下の表の通りであった。

曲名	作曲者	訳詞者	ジャンル	出版社
枯葉	J. コスマ	岩谷時子	シャンソン	音友1
おお シャンゼリゼ	M. ウィルショー, M. A. ディガン	安井かずみ	シャンソン	音友2、 教芸1
愛の賛歌	M. モノ	岩谷時子	シャンソン	音友2
ウィーンわが夢の街	R. ジーツィンスキー	あらかわひろし	ヴィナーリート	音友2、 教芸1
民衆の歌	C.-M. シェーンベルク	岩谷時子	ミュージカル	音友1
見果てぬ夢	M. リー	岩谷時子	ミュージカル	音友3
All I Ask of You	A.L = ウェバー	浅利慶太	ミュージカル	教芸3
The Point of No Return	A.L = ウェバー	浅利慶太	ミュージカル	教芸3
いつか王子様が	F. チャーチル	海野洋司	映画音楽	音友2

歌唱指導における訳詞歌曲の活用

メリー・ウィドウ・ワルツ	F.レハール	滝弘太郎・堀内敬三	オペレッタ	音友 2、 教芸 3
ヴィリアの歌	F.レハール	滝弘太郎	オペレッタ	音友 3
乾杯の歌	G.ヴェルディ	芹山かな	オペラ	教芸 1
歌の翼に	F.メンデルスゾーン	林望・久野静夫	ドイツ歌曲	音友 2、 教芸 1
セレナード	F.シューベルト	堀内敬三	ドイツ歌曲	音友 2
野ばら	F.ヴェルナー	近藤朔風	ドイツ歌曲	教芸 1
流浪の民	R.シューマン	石倉小三郎	ドイツ合唱曲	教芸 2
ソルヴェイグの歌	E.グリーグ	堀内敬三	ノルウェー歌曲	教出 2
母が教えた歌	A.ドヴォルザーク	堀内敬三	チェコ歌曲	教出 2

音友：音楽之友社「改訂版 高校生の音楽 1・2・3」 教出：教育出版「音楽Ⅱ 改訂版 Tutti」

教芸：教育芸術社「高校生の音楽 1・2」「Joy of Music」 数字は学年

原詩の掲載がなく訳詞のみの曲は、おおよそ以下のジャンルに区分できる。

- ・昔から歌い継がれて定訳となっている歌曲あるいは民謡
- ・オペラ、オペレッタ、ミュージカル等の舞台芸術作品
- ・シャンソン等ポピュラー系の作品

これらをジャンルの垣根をなくし、一括りに訳詞歌曲というあらたなジャンルとして構成してみると、声楽指導での教材としての活用に加えて、一貫性を失うことなくプログラム構成の幅が広がるので、演奏会用レパートリーとしての価値も見いだせるのではないだろうか。

3. 訳詞歌曲についての学生へのアンケート

訳詞歌曲を教材として声楽指導へ活用するための準備として、「合唱」の授業においてヴェルナー作曲《野ばら》を扱った。アンケートを実施して、訳詞歌唱を体験した学生の感想を探ってみた。アンケート対象の2年生8名は声楽実技科目でイタリア歌曲（原語歌唱）、日本歌曲を数曲ずつ歌っており、それぞれの歌曲に関する特性を体感しつつある状態であった。ほとんどの学生が訳詞歌曲を歌った経験がなく、わずかに《きよしこの夜》が挙げられたのみであった。実際に歌われていない可能性もあるが、訳詞歌曲は中学校の教科書でも扱われているので、歌っていても訳詞歌曲であるという認識がなかったものと思われる。

高等学校教科書（教育出版）に掲載の新実徳英編曲による楽譜を使用した。混声4部合唱、歌詞はドイツ語と日本語併記、その他に日本語直訳も準備した。日本語訳詞でのメロディ斉唱、ドイツ語歌詞でのメロディ斉唱、日本語訳詞での合唱、ドイツ語歌詞での合唱という流れで進めて、おおよそ合唱で歌えるようになった時点でアンケートを実施した。対象が少人数であるので参考程度のデータということになるだろうが、得られた回答を参考にしつつ訳詞歌曲の教材としての可能性を検討したい。

訳詞歌唱についての学生の感想

- ・訳詞で歌う場合のよい点
- 「日本語なので歌いやすい」「歌詞の意味がわかるため想像しやすい」「1番から3番を通

じて同じ言葉が使われていて覚えやすい」など、当然ではあるが、日本語による歌いやすさについての回答が多かった。「一つの音に対して基本的に1文字」「リズムに合うように訳されている」など、旋律に歌詞をあてる際の特徴や工夫に関する感想、「原語の意味を理解しやすい。訳詞で歌った後に原語で歌う場合に歌詞の内容等を踏まえて歌いやすい」のように、原語で歌唱する場合に歌詞の内容の捉えやすさにつながるという感想が挙げられた。

・訳詞で歌う場合のよくない点

「本当にその意味なのかわからない（原語と全く同じ内容なのだろうか）」「原語の意味の100%ではあわせない」など、訳詞が原詩のすべてを訳出していないことに関する回答、「昔の言葉が多く使われていて、情景を直接イメージしにくい」「歌詞が文語調で意味を捉えたり、言葉の句切りを捉えて歌うのに時間がかかりやすい」など訳詞が文語体である故の歌詞の意味の捉えにくさについての記述があり、それに起因すると思われるが「歌詞が覚えづらい」という回答も見られた。

原語歌唱についての感想

・原語による歌唱のよい点

「ドイツ語の言語の特徴がわかる」「ドイツ語の発音を学ぶことができる」など、新しく学ぶ言語への関心、「高音も出やすい」「ドイツ語の方が歌いやすかった」など演奏面での感想、「言葉とフレーズが合っている」「一番盛り上がる11小節に Röslein を強調するなど詩と曲の強弱が合っている」「盛り上がる小節以外、すべて n で終わっている」など言葉と音楽の関連性も指摘された。

・原語による歌唱のよくない点

「一つの音に対して複数の文字を発音しなければならない」「最初歌うのが難しい」「練習しなければ歌いにくい」などドイツ語による演奏の難しさに関する回答、「対訳がないと、歌詞の内容等の理解が難しい点、言葉のまとまりや句切りを把握しにくいと、歌う際に支障が出るかもしれない」「意味を知ってから歌わないと表現するのは大変」など内容を理解する部分や、表現する上での困難さが挙げられている。

「訳詞」と「直訳」の比較

「直訳の方が、意味が頭に入ってきてやすかったので、情景が浮かんだ」「訳詞の方が、直訳よりも詩の内容や情景等がよく伝わってくるように感じた」それぞれ異なる見解であったが、「訳詞は言葉が凝縮されているため、この曲を学ぶ際には、本来の直訳を見て理解しなければならない」いずれにしてもこの作業が大切であろう。

《野ばら》を歌う場合、原語と訳詞のどちらが適切であるか

・原語が適切である

「その国の曲をその言葉で歌うべき。あまり他国の曲を歌う機会が少ないため貴重な経験となるから」「作曲された原語で歌った方がよい。作曲者も原語を想定して作曲しているから」原語を尊重している様子、また原語で歌うことに興味を持っていることがわかる。

「原語でも発音しやすく歌いやすい」「強弱がつけやすいから表現しやすい」「日本語ではないもの（ドイツ語）の歌、発音を勉強できるから。Aの発音など、開く発音が高い音のところに出てきていて歌いやすかった」発音に慣れていないが歌いやすいという感想が多かった。

「テンポもゆっくりのため外国語の歌を歌うという目的が達成しやすい」遅めのテンポが歌いやすさにつながったようである。

・どちらとも言えない

「歌う人の段階（年齢、技術）によって変わると思う。ドイツ語を（外国語）を学ぶという点では、原語の方が適しているし、一概には言えない」「原語と訳詞のいずれにもメリット、デメリット。双方を効果的に取り入れることで、曲への理解（知識面）も歌唱（技術、技能面）の向上を期待できる」それぞれのよい部分を効果的に取り入れるということは、今後の歌唱指導で進めていきたいと考えていた内容であり、期待していた回答であった。実践の中でこのような捉え方が多くなるように取り組みたい。

4. 訳詞歌曲の歌唱指導への応用

これまで外国語歌曲の歌唱において、歌詞の内容が十分表現されていない場合、原語の意味に即した日本語を即興でつけ歌わせるという「部分訳詞」による歌唱指導は行ってきたが、訳詞歌曲そのものを教材として扱ったことはなかった。ここでは訳詞歌曲を授業の中で活用することを見据えて具体案を提示したい。

「声楽実技科目」においては、初期に行うグループレッスンによる授業中心に訳詞歌曲を活用したい。イタリア歌曲、民謡で発声、ミュージカルで歌われる楽曲でスケール豊かな表現力を身につけるなど、目的に応じた使用を考えているが、ここでは、実際に歌った上で回答を得ている《野ばら》について検討する。《野ばら》は原語で歌うべきという回答が多かったように、学生の知的好奇心を考えると原語による歌唱は必須であろう。ドイツ歌曲入門という位置づけになるが、日本語の表現法、歌詞と音楽の関連性に関する比較についても目的としたい。

最初は初見視唱の練習も兼ね、訳詞で歌唱する。ゆったりとしたテンポであり、ひとつの母音で2拍（8分音符2つ分）以上伸ばせる部分は、同じ母音が持続するので発声に留意して歌唱する。そして直訳も参考にして歌詞の内容を余すところなく把握し、その後レガート唱法を基本においた上で日本語特有の表現法に取り組んでいく。

その後に行うドイツ語歌唱では、どのような難しさが予想されるのか。（以下、譜例参照）先のアンケートで「一つの音に対して複数の文字」と回答があったが、例えば2小節目にある *stehn* は一つの音に子音が3つ（*st,h,n*）含まれている。*stehn* の部分を仮名で表すと「シュテ（イ）ーン（*fte:n*）」となるが、日本語では「り」のみである。4小節を見るだけでも *ein,Röslein,stehn,Heiden* の *n*、*R(Röslein)* の巻き舌、二重母音(*ei,au*)、ウムラウト(*ö*)などの難しさを印象づける要素が散見される。それに対し訳詞はローマ字で表すと子音、母音の種類が少ないことが一目瞭然であり、それが歌いやすさ、声の出しやすさに結びついていることがわかる。

ドイツ語歌唱に慣れてきたら、あらためて訳詞との比較を試みる。ドイツ語の場合、言葉のアクセント（一）と音楽の拍が一致している。訳詞の場合は、助詞が拍の手前にあり強調されず、拍に語頭が置かれるので「見たり」、「薔薇」の言葉が引き立つようになっている。これは一例であるが、両者を比較することにより、それぞれの特徴を把握することができる。

譜例 ヴェルナー《野ばら》冒頭4小節

Sah ein Knab' ein Rös - lein stehn, Rös - lein auf der Hei - den,
 逐語訳 [見た ひとりの少年が ひとつの小さな薔薇 ある 小さな薔薇を ~にある 荒れ野]
 直訳 [少年がひとつの小さな薔薇を見つけた 荒れ野にある小さな薔薇を]
 訳詞ローマ字 wA rA bE hA mI tA rI nO nA kA nO bA rA
 訳詞 わ ら べ は み た り の な か の ば ら
 (童 は 見 た り 野 な か の 薔 薇)

その他に訳詞歌曲をジャンルにとらわれることなく、曲自体に演奏価値を見いだし、試験の課題曲、発表会や演奏会のプログラムに取り入れていきたい。例えば、中学校教科書にも掲載されているクルティス作曲《帰れソレントへ》は、発声訓練や日本語による音楽表現の他、異なる訳詞の比較などで教材として使用する他、音楽表現を高めることで、聴衆に聴かせることのできる演奏会用レパートリーとしていずれ活用できそうである。

音楽専攻科目ではない「音楽 I B」では小学校の歌唱共通教材を主教材として使用している。授業の目的は共通教材による歌唱法の習得にあるが、共通教材に見られる音域の広さ、歌詞の難しさなどにより、歌うことに躊躇が見られる場面もあり、発声技術の向上やとりわけ歌う楽しさを見い出すという目的にはそれほど適しているとは思えない部分もある。例えば、実際それほどの難しさはないが《もみじ》は1オクターブ+長2度の音域、高いレの音が3回出てくる。また《このぼり》は「付点8分音符」+「16分音符」のリズムが連続し、歌詞は文語体であり難しい言葉が散見される。そこで発声面の強化を図るための補助教材として、ここでもヴェルナーの《野ばら》を見てみると、音域が1オクターブ内で音の動きがなだらかであり歌いやすそうである。また、《野ばら》の拍子である8分の6拍子は小学校の共通教材にはないので、それを体験する貴重な機会となる。「声楽実技科目」でも述べた母音が持続できるという特徴により、発声の訓練として有効な教材となりそうである。

5. おわりに

今回、訳詞歌曲の教材としての可能性を考察したが、これからの実践で有用性を確認していきたい。訳詞歌曲は日本語歌唱力を含む、声楽技術の向上に明確な役割を果たせるのか、特に原語歌唱への興味を喚起させることにつながり、曲の内容を演奏に反映できる表現力が身につくのかという部分に関心を抱いている。ポピュラー系の作品、ミュージカル等は教材として、ほとんど扱ってこなかったが、近年の合唱曲はポップスの要素が強いもの、世界の様々な音楽の要素を取り入れたものなど多岐にわたっており、それらに対応するためにも訳詞歌曲を取り入れ教材の幅を広げて、発声も含めた表現の多様化を目指したい。また、訳詞歌曲を組み入れた曲目プログラムも検討し、コンサートでの演奏を実現したい。

¹ 前田紘二 『明治の音楽教育とその背景』 竹林館, 2010, pp.168-169.

² 藍川由美 『これでいいのか、にっぽんのうた』 文芸春秋, 1998, pp.30.

³ 文部科学省 小・中学校学習指導要領 Q&A 7.音楽に関すること (小学校) 答 7-2